Research Monograph Series

『即の存在論』

——生成の位相存在論における力・現実接地・記号生成——

The Ontology of Soku: Generative Force, Grounding, and Symbolic Generation in Generative Topological Ontology

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0 July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Ontology of Soku: Generative Force, Grounding, and Symbolic Generation in Generative Topological Ontology

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文の目的は、「即（そく）」を、単なる即時性、同一性、融合、あるいは日本思想に固有の語法としてではなく、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology; GTO）における基礎的な存在論概念として再構成することにある。
生成の位相存在論において、存在は固定された実体ではなく、自己・自己以外・環境の相互作用を通して絶えず生成される位相的関係として理解される。しかし、存在生成が成立するためには、自己と世界があらかじめ完全に分離した二項として存在するのではなく、両者が差異を保持したまま直接的に関係を生成する契機が必要となる。本論文は、この分離以前かつ生成開始の位相を「即」と定義する。

ここでいう即とは、自己と自己以外が同一化されることではない。即とは、両者の差異が消去される以前に、その差異そのものが関係生成の力として作動する状態である。したがって、即は「差の消失」ではなく、「差が力として現れるインターフェイス」である。

本論文ではさらに、即を「力」「現実接地」「記号生成」という三つの問題系から考察する。第一に、力とは外部から与えられるエネルギーではなく、自己と自己以外の差異が現実的関係へ移行するときに発生する生成的力動として理解される。第二に、現実接地とは、記号が抽象的な記号体系内部で自己循環することを超え、身体・環境・他者・時間・偶然性との相互作用へ接続されることである。第三に、記号生成とは、既存の意味を操作することではなく、即という現実的接続を通して新たな差異と意味が生成される過程である。

この観点から見ると、現代社会における即の喪失は、記号が現実から切断され、評価・証明・情報・アルゴリズム・デリバティブ的操作の内部で循環する状態として理解できる。そこでは、意味は存在しても力が生じず、情報は増大しても存在生成は起こらない。本論文は、この状態を、一般抽象的体系が個別具体的な現実接地から離脱した位相として捉える。

これに対して、芸術、身体実践、生活、建築、インターフェイス、自然との相互作用は、記号を再び現実へ接地させ、差異を生成的な力へ転換する契機となりうる。本論文は、「生活即芸術」をこの観点から再解釈し、即を生活と芸術の同一化ではなく、生活がその都度芸術生成へ直接接続されうる存在論的条件として位置づける。

以上より、本論文は即を、存在生成において自己と自己以外、記号と現実、抽象と具体、現在と未来を接続し、差異を力へ変換する基礎的インターフェイスとして定義する。即

の存在論は、生成の位相存在論を現実接地の水準から補強するとともに、芸術、人工知能、情報社会、文化生成および日常生活における「生きられた生成」の条件を明らかにする理論的基盤を提示する。

キーワード

生成の位相存在論；即；力；現実接地；記号生成；インターフェイス存在論；存在生成；自己；自己以外；差異；身体；生活即芸術；一般抽象化；個別具体化；人工知能；デリバティブ空間；生成学

目次

Contents

第0章 方法論的序論（Methodological Note） 1
第1章 「即」の哲学史 5
第2章 「即」の公理.....13
第3章 「即」の喪失.....17
第4章 芸術とは「即」の設計である 24
第5章 人工知能と「即」 28
第6章 力の存在論.....31
結論.....37
今後の課題 39
参考文献 40
方法論的声明.....44

第0章　方法論的序論（Methodological Note）

0.1 研究の目的

本論文の目的は、「即（Soku）」の概念を宗教的・形而上学的概念としてではなく、存在生成を記述するための基礎概念として再構成することにある。

「即」は日本仏教、とりわけ華厳思想や真言密教において、「即身成仏」「煩悩即菩提」「色即是空」などの命題を通して理解されてきた。しかし、それらはしばしば「AはBである」という同一性、あるいは二元論の否定として説明されることが多かった。

本研究は、この理解を根本的に再検討する。

生成の位相存在論の観点から見るならば、「即」は固定された二項の同一性ではない。「即」とは、異なる存在位相が互いに接続し、新たな存在を生成する生成的契機である。

したがって、「即」は静的な存在論ではなく、動的な生成論に属する概念として理解されなければならない。

0.2 問題設定

現代社会は、情報技術、人工知能、金融市場、SNS、評価システムなどによって高度に記号化されている。

これらのシステムでは、

評価

ランキング

学歴

肩書き

アルゴリズム

市場価格

などの記号が、現実との接触を伴わなくとも自己循環する。

記号はさらに別の記号を生み、

評価はさらに評価を生み、

情報はさらに情報を生成する。

本研究では、この状態を「**即の喪失**」として捉える。

「即」が失われた世界では、記号は現実へ接地されることなく循環し続ける。その結果、人間は身体・自然・他者との直接的な相互作用を通じて存在を生成する契機を失い、「生きている」という実感そのものが希薄化する。

この現象は、生成の位相存在論において論じてきた「自己外部化の限界」「人間以前性と自己以前性」「言語デリバティブ論」「評価・証明・価値の力学」と共通する構造を有している。

0.3 本論文の基本仮説

本論文は、以下の三つの仮説を提示する。

第一仮説

「即」は存在の同一性ではなく、異なる存在位相がそれぞれの差異を保持したまま接続する生成的構造である。

第二仮説

「力」とは、存在そのものに内在する属性ではなく、「即」という接続構造が生成として現象するときに生じる運動である。

すなわち、

差異
→ 即
→ 力
→ 存在生成

という構造をもつ。
すなわち、異なる位相の差異が「即」という接続構造を形成し、その接続が運動として現象するときに力が生成され、その力によって新たな存在生成が生じる。

第三仮説

現代社会は、「即」を失うことによって、現実接地を伴わない記号デリバティブ空間へ移行している。

そこでは論理的一貫性や評価体系は維持されるが、それらは存在生成の力を生み出さない。

0.4 方法論

本研究は実証研究ではない。

本論文は、

存在論

位相存在論

インターフェイス存在論

仏教思想

芸術理論

AI存在論

を横断しながら、「即」を生成の位相存在論における公理概念として再定義する理論研究である。

分析方法としては、

仏教思想における「即」の構造分析

生成の位相存在論との理論的接続

「力」の存在論的再定義

現代社会への適用

人工知能・芸術・社会システムへの展開

という順序で議論を進める。

0.5 本論文の位置づけ

本論文は、美学者母がこれまで展開してきた理論体系において、「力」を存在論的に基礎づける位置を占める。

その理論的連関は以下のように整理できる。

『生成の位相存在論の公理系』：存在生成の基本原理。

『自己外部化の限界と存在生成』：自己と自己以外を媒介するインターフェイス。

『人間以前性と自己以前性』：存在生成に先行する現実接地の位相。

『言語デリバティブ論』：記号生成と自己循環の構造。

『評価・証明・価値の力学』：評価体系が生成する社会的力学。

本論文：

これらを統合する生成的接続構造としての「即」と、そこに現れる生成力の存在論。

この意味で、「即」は個別概念ではなく、生成の位相存在論全体を貫く基礎原理として位置づけられる。

第1章　「即」の哲学史

——同一性から生成力への転回——

1.1　「即」はなぜ誤解されてきたのか

「即」という語は、日本仏教、とりわけ華厳思想・天台思想・真言密教において中心的概念として用いられてきた。

代表的な命題として、

色即是空

煩悩即菩提

即身成仏

などが挙げられる。

一般には、

A 即 B

とは

A = B

すなわち、

「AとBは本質的に同じである」

という同一性命題として理解されることが多い。

しかし、この理解には理論的限界が存在する。

もし「即」が単なる同一性であるならば、

「色」と「空」は区別されない。

「煩悩」と「菩提」も区別されない。
「身体」と「仏」も区別されない。
しかし実際には、
それらは区別されたまま、
同時に結び付いている。
つまり、
「即」は
同じであること
ではない。
異なるものが、
異なるまま接続すること
である。
ここに「即」の本質がある。

1.2　「即」は関係ではない

さらに重要なのは、
「即」は単なる関係でもないことである。
関係という概念は、
通常、
A
↓
関係
↓
B
という二項構造を前提としている。
つまり、
まず存在があり、

その後に関係が生じる。

しかし、

生成の位相存在論では、

この順序を逆転させる。

存在が先にあるのではない。

接続そのものが存在を生成する。

したがって、

「即」は

存在

↓

関係

ではなく、

接続

↓

存在

なのである。

この点で、

「即」は

存在論よりも深い。

1.3　生成する「即」

本研究では、

「即」を次のように定義する。

定義1（即）

即とは、

異なる位相がそれぞれの差異を保持したまま接続し、

新たな存在生成を可能にする生成的構造である。

ここで重要なのは、
生成されるものは、
Aでもない。
Bでもない。
AとBとの間から
新たなCが生成されることである。
つまり、
A
×
B
↓
C
である。
これは、
生成の位相存在論の基本生成式
と一致する。
したがって、
「即」は
A=B
という同一性ではなく、
A×B→C
という生成を可能にする接続構造なのである。

1.4　生活即芸術の再定義

この定義によれば、

「生活即芸術」
という命題も、
従来とは全く異なる意味を持つ。
従来は、
生活そのものが芸術である、
という美学的スローガンとして理解されることが多かった。
しかし本研究では、
生活
×
芸術
↓
新しい生活
あるいは
新しい芸術
が生成されることを意味する。
つまり、
生活が芸術へ変化するのではない。
芸術が生活へ吸収されるのでもない。
生活と芸術との接続によって、
新しい位相が生成される。
だからこそ、
生活即芸術は、
芸術論ではなく、
存在論なのである。

1.5　「即」と力

ここで、

本論文の中心的問題に到達する。
それは、
「即」と力はいかなる関係にあるのか、
という問題である。
力は、
物体の内部に固定的に存在するものではなく、
人間の内部に所有されるものでもない。
力とは、
異なる存在位相が

「即」

という接続構造を形成し、
その接続が生成として運動するときに現れる。
したがって、
力とは存在の属性ではなく、
生成の現象である。
「即」は力そのものではない。
「即」は力が生成的運動として現れるための接続構造である。
したがって、
次の命題が成立する。

命題1
力とは、「即」という接続構造が生成として現象する運動である。

これは、
ニュートン力学における力とも、

社会学における権力とも異なる。

ここでいう力とは、

存在を生成し続ける生成力（Generative Force）である。

1.6　「即」の喪失と記号世界

ここで、

現代社会を改めて考える。

現代社会では、

記号は

記号だけを参照している。

評価は評価を生み、

情報は情報を生み、

AIはAIの文章を学び、

市場は市場の期待を価格化する。

つまり、

記号

↓

記号

↓

記号

という循環が成立している。

そこには、

自己、

身体、

自然、

他者、

時間、
偶然、
死、
という現実との接続が存在しない。
つまり、
「即」
が失われている。
その結果、
社会は
意味を生み続けるが、
力を生み出さない。
本研究では、
この状態を
「即を喪失した記号デリバティブ空間」
と定義する。
この空間では、
論理や評価は自己増殖するが、
存在そのものは生成されない。
したがって、
現代人が経験する空虚さとは、
意味の欠如ではなく、
「即」という生成的接続構造の欠如と、
それに伴う生成力の喪失として理解されるべきである。

第2章　「即」の公理

――生成の位相存在論における生成力の構造――

2.1　存在は「即」によって生成される

従来の存在論では、存在は実体あるいは主体として前提され、その後に他者や世界との関係が生じると考えられてきた。

しかし、生成の位相存在論は、この順序を根本的に転換する。

存在は、はじめから完結したものではない。

存在とは、自己・他者・自然・時間・環境との接続を通じて不断に生成される位相的過程である。

このとき、その生成を可能にする契機が「即」である。

したがって、本研究では次の第一公理を提示する。

公理1（生成公理）

存在は実体として存在するのではなく、「即」による接続を通じて生成される。

ここで「即」は、存在に後から付与される関係ではなく、存在生成そのものの条件である。

2.2　「即」はインターフェイスである

『自己外部化の限界と存在生成』において論じたように、存在は自己だけでは生成されない。

自己は自己以外との接続を必要とする。

しかし、その接続は融合でも同一化でもない。

自己と自己以外は、それぞれの差異を保持したまま、新たな生成を可能にする。

この生成の場こそがインターフェイスである。

したがって、

公理2（インターフェイス公理）

「即」とは、異なる位相が互いの差異を保持したまま生成を可能にするインターフェイスである。

ここで重要なのは、「即」が差異を消去するのではなく、差異を保持する点である。
もし差異が完全に消滅すれば、生成も停止する。
生成とは差異の維持によって可能となる。

2.3　「即」は現実接地を必要とする

現代社会では、多くの記号体系が現実との接触を失ったまま自己循環している。
評価は評価を生み、情報は情報を生み、アルゴリズムはアルゴリズムを最適化する。
この循環は高度な整合性を持つが、現実そのものとの相互作用を保証しない。
ここで本研究は、「即」の成立条件として現実接地を導入する。

公理3（現実接地公理）

「即」は、自己・他者・自然・身体・時間との現実的相互作用を伴う場合にのみ成立する。

この公理によって、「即」は単なる論理的接続や概念的対応とは区別される。
「即」は、経験・実践・身体性を伴う生成的出来事なのである。

2.4　「即」と力

本研究では、「力」を物体や主体に内在する属性とは考えない。
力は、「即」という接続構造が生成的運動として現象するときに現れる。
すなわち、
自己と自然、
自己と他者、
生活と芸術、
人間と人工知能、
これらが現実接地を伴って接続するとき、存在生成の運動が生じる。
この運動そのものが力である。したがって、

公理4（生成力公理）

力とは、「即」という接続構造が位相変換として現象するときの生成的運動である。
この意味で、力は実体ではなく出来事である。

2.5　「即」と時間

『人間以前性と自己以前性』では、存在生成は現在だけでは説明できず、未来・現在・過去が相互に折り重なる時間構造を持つことを論じた。

「即」もまた、この非線形的時間のなかで成立する。

「即」は瞬間的な一致ではない。

未来への投企、現在の実践、過去の経験が交差する場において生成される。

したがって、

公理5（時間公理）

「即」は、未来・現在・過去の位相が重なり合う生成的時間において成立する。

この時間性は、先行研究において論じてきた「畳み込み」の概念とも対応する。

2.6　「即」と記号

ここで「即」は、「言語デリバティブ論」と接続される。

言語や記号そのものは、「即」ではない。

しかし、それらが現実との接地を回復するとき、「即」は成立する。

逆に、現実接地を失った記号は、記号同士の循環を続ける。

その状態では意味は生成されても、存在は生成されない。

したがって、

公理6（記号公理）

記号は、「即」を通じて現実へ接地するときにのみ、存在生成へ参与する。

この公理は、人工知能、芸術、教育、経済など、現代社会に広く適用可能である。

2.7　本章の理論的帰結

以上の六つの公理から導かれる結論は明確である。

「即」とは、単なる東洋思想の概念ではない。

それは、

存在生成を可能にする接続条件であり、
インターフェイスを成立させる生成的構造であり、
現実接地を伴う接続を可能にする条件であり、
過去・現在・未来の位相を接続する時間的構造であり、
記号を存在生成へ参与させる媒介である。
したがって、
「即」は生成の位相存在論における、
最も基礎的な公理概念として位置づけられる。

第3章　「即」の喪失

――記号生成社会と現実接地の消失――

3.1　現代社会は「即」を失った社会である

生成の位相存在論の立場から見るならば、現代社会の本質的特徴は情報化でもデジタル化でもない。

その根本には、「即」の喪失が存在する。

「即」が成立している世界では、

自己は自然へ接地し、

身体は世界へ接地し、

芸術は生活へ接地し、

言葉は経験へ接地する。

これらは単なる意味の対応ではない。

相互作用そのものが新たな存在を生成する。

しかし現代社会では、

その生成構造が徐々に失われ、

記号だけが自己増殖する構造へ移行している。

したがって、

本研究では現代社会を

「即を喪失した記号生成社会」

と定義する。

3.2　記号は記号を生成する

『言語デリバティブ論』では、

言語は現実を記述するものではなく、

未来を先取りしながら新たな言語を生成する構造であることを論じた。

しかし、

生成には二種類存在する。
第一は、
現実接地を伴う生成である。
自己が自然、
身体、
他者、
偶然、
死、
などとの接触を通して生成する言語である。
第二は、
記号だけが記号を生成する循環である。
例えば、
AIはAIの文章を学習する。
SNSはSNSの評価を学習する。
市場は市場の期待を価格へ反映する。
大学は大学の評価を評価する。
論文は引用を引用する。
これらは、
論理的には整合している。
しかし、
整合していることと、
存在が生成されていることは
全く異なる。
ここに、
「即」の喪失がある。

3.3　評価は存在を証明しない

『評価・証明・価値の力学』では、

評価そのものが社会的な力を生み出すことを論じた。

本論文では、

さらに一歩進める。

評価は、

存在を証明しない。

評価は、

評価を生成する。

証明は、

証明を生成する。

価値は、

価値を生成する。

つまり、

評価

↓

証明

↓

価値

↓

評価

という閉じた位相が形成される。

ここでは、

「即」は存在しない。

その結果、

社会は

評価を力と誤認する。

しかし、
評価そのものは
生成力ではない。
生成力は、
現実接地を伴う「即」という接続構造が、
生成的運動として現象するときに成立する。

3.4　人工知能は「即」を持つのか

人工知能は、
膨大な記号空間を学習する。
そこでは、
言語は
さらに言語を生成する。
この構造は、
極めて高度な自己生成能力を持つ。
しかし、
そこには、
身体、
自然、
死、
偶然、
他者、
という現実接地が存在するとは限らない。
したがって、
人工知能が生成しているものは、
存在そのものではなく、
記号生成である。

これは、
人工知能を否定することではない。
むしろ、
人工知能によって、
人間社会そのものが、
どれほど記号生成へ依存していたかが可視化されたのである。
AIは、
「即」を失った社会を映し出す鏡なのである。

3.5　芸術は「即」を回復する

ここで芸術の意味が変わる。
芸術は、
美しい作品を作ることではない。
芸術とは、
記号を現実へ接地する営みである。
生活即芸術とは、
生活が作品になることではない。
生活そのものが、
世界との新しい接続を生成することである。
つまり、
芸術とは、
「即」を回復する行為である。
それゆえ、
芸術は、
人間が失った生成力を回復する
存在論的実践となる。

3.6　力の喪失

現代人が経験する

空虚、

退屈、

無気力、

自己喪失、

これらは、

情報不足ではない。

評価不足でもない。

能力不足でもない。

本研究では、

それらを

「即」の欠如による生成力の喪失

として理解する。

人間は、

自己、

自然、

他者、

時間、

死、

芸術、

との「即」を失うとき、

存在は維持される。

しかし、

力は生成されない。

したがって、

人間は

生きている。

しかし、

生きている実感を失う。

ここに、

現代社会の存在論的病理がある。

第4章　芸術とは「即」の設計である

――生成するインターフェイスとしての芸術――

4.1　芸術の再定義

近代以降、芸術は主として作品制作や美的表現として理解されてきた。

そこでは、

作品

作者

鑑賞者

という三項関係が基本構造となる。

しかし、この理解では、芸術は文化制度の一部に限定される。

生成の位相存在論は、この前提を採用しない。

芸術とは、作品ではない。

芸術とは、存在生成が起こる条件を設計する営みである。

したがって、本研究では次の定義を提示する。

定義2（芸術）

芸術とは、「即」を生成するインターフェイスを設計する実践である。

芸術は物を作ることではない。

新たな存在が生成される条件を構築することである。

4.2　生活即芸術の存在論

「生活即芸術」はしばしば、「生活そのものが芸術である」という理念として理解されてきた。

しかし、この理解では「即」は依然として等号として扱われている。

本研究では、「生活即芸術」を次のように再定義する。

生活とは、日常的反復ではない。

芸術とは、作品制作でもない。

両者のあいだに「即」が成立するとき、

生活は新たな意味を獲得し、

芸術は制度を超えて存在生成へと開かれる。

したがって、

「生活即芸術」とは、

生活＝芸術

ではなく、

生活と芸術との接続から、新しい生活と新しい芸術が同時に生成される出来事

なのである。

4.3　Web Installationと「即」

美学者母が提唱してきたWeb Installationは、この「即」を設計する実践として理解できる。

Web Installationでは、

現実空間と情報空間、

身体とネットワーク、

自己と他者、

時間と場所が相互に接続される。

ここで重要なのは、Web Installationが情報を提示することではなく、接続そのものを経験として生成することである。

たとえば、QRコードやドメイン名は、それ自体が作品ではない。

それらは、現実と情報を結ぶインターフェイスとして機能する。

作品性は物体に宿るのではなく、接続の出来事に宿る。

この意味で、Web Installationは「即」を可視化し、経験可能にする芸術形式である。

4.4　盆栽・見立て・納まり

同様の構造は、美学者母が近年取り組んでいる盆栽や、日本文化における「見立て」「納まり」にも見いだされる。

盆栽は自然の縮小模型ではない。

自然と人間とのあいだに、新たな位相を生成するインターフェイスである。

見立てもまた、ある対象を別の対象として単純に置き換えることではない。

二つの異なる存在のあいだに、新たな意味と経験を生成する「即」の実践である。

建築における「納まり」も同様である。

図面には現れない細部の調整を通して、異なる素材や構法が一つの構造として成立する。

納まりとは、部材を固定する技術ではなく、異質なもののあいだに生成的接続を成立させる技法である。

これらはいずれも、「即」の設計として理解できる。

4.5　芸術と力

本研究では、「力」は芸術作品の属性ではない。

芸術とは、「力」を表現するものではなく、「力」が生成される条件を設計する営みである。

作品が人を動かすのではない。

作品を介して成立する「即」が、人と世界との新たな接続を生み、その接続のなかで力が生成される。

したがって、芸術の価値は完成度や美しさだけでは測れない。

重要なのは、その実践が新たな生成を引き起こすかどうかである。

4.6　芸術は制度ではなく生成である

近代芸術制度は、作品・作家・美術館・市場・批評によって成立してきた。

しかし、この制度もまた記号生成の体系となり得る。

作品は評価され、

評価は価格を生み、

価格は権威を生み、

権威はさらに評価を生む。

この循環だけでは、「即」は成立しない。

生成の位相存在論から見れば、芸術制度そのものが目的ではない。

目的は、「即」を回復し、新たな存在生成を可能にすることである。

したがって、芸術は制度への所属ではなく、存在生成の実践として理解されるべきである。

第5章　人工知能と「即」

――生成する知性と現実接地の存在論――

5.1　人工知能は何を生成しているのか

人工知能は大量の情報を学習し、新たな文章、画像、音楽、プログラムを生成する。

この能力は、しばしば「創造」と呼ばれる。

しかし、本研究は問いを立て直す。

人工知能は、本当に存在を生成しているのか。

あるいは、記号を生成しているのか。

生成の位相存在論では、この二つは区別される。

存在生成とは、自己・他者・自然・時間・身体との相互作用を通じて、新たな位相が形成されることである。

一方、記号生成とは、既存の記号体系の内部で新たな記号が組み合わされる過程である。

人工知能は後者において極めて高い能力を有する。

しかし、それだけでは「即」は成立しない。

5.2　ハルシネーションの再解釈

『言語デリバティブ論』では、ハルシネーションを単なる誤りではなく、記号生成の構造として位置づけた。

本研究では、その議論をさらに発展させる。

ハルシネーションとは、

「存在しないもの」を生み出すことではない。

それは、

現実接地が未確定な記号生成

である。

その生成が、人間との実践を通じて現実へ接地するとき、新たな知識や芸術や技術となる可能性がある。

反対に、接地を欠けば、それは自己循環する記号に留まる。

したがって、問題は「ハルシネーションをなくすこと」ではない。

問題は、その生成が「即」を獲得するかどうかである。

5.3　インターフェイスとしてのAI

AIは主体でも客体でもない。

生成の位相存在論では、AIは人間と世界とのあいだに位置するインターフェイスとして理解される。

人間はAIを通じて世界を読み替え、AIは人間との対話を通じて新たな記号を生成する。

しかし、その過程が「即」となるためには、人間側の経験・身体・責任・実践が不可欠である。

AIは接続を支援することはできる。

しかし、接続を存在生成へと転換するかどうかは、人間を含む全体の関係性に依存する。

5.4　AIは「力」を持つのか

近年、AIは人間を超える能力を持つという議論が盛んである。

しかし、本研究では能力と力を区別する。

能力とは、記号を処理し、予測し、生成する性能である。

一方、力とは、「即」を通じて新たな存在を生成する運動である。

AIは高い能力を持ち得る。

しかし、その能力が力となるのは、現実接地を伴う生成過程のなかに組み込まれたときである。

したがって、「力」はAIの内部に宿る属性ではなく、人間・AI・世界の接続によって生成される。

5.5　AI時代における人間

AIの発展は、人間の価値を失わせるものではない。

むしろ、人間とは何かを問い直す契機となる。

計算速度や情報量では、人間はAIに及ばない。

しかし、人間は身体を持ち、時間を生き、死を経験し、自然や他者との相互作用を通じて現実へ接地する存在である。

この接地があるからこそ、「即」が成立し、新たな存在生成が可能となる。

したがって、AI時代における人間の固有性は、「即」を成立させる存在であることに見いだされる。

5.6　生成の位相存在論から見たAIの役割

生成の位相存在論において、AIは人間の代替ではない。

AIは、人間が「即」を成立させるための新たなインターフェイスである。

AIは記号生成を飛躍的に拡張する。

しかし、その記号が現実へ接地し、新たな存在を生成するかどうかは、人間の実践に委ねられている。

したがって、AIは存在生成の主体ではなく、存在生成を媒介する生成環境の一部として位置づけられる。

第5章の結論

本章では、人工知能を能力や知性の問題としてではなく、「即」の成立条件という観点から再考した。

その結果、AIは記号生成能力を高度に発展させる一方で、「即」はAI単独ではなく、人間・身体・自然・社会との現実接地を含む生成過程において成立することを示した。

この整理によって、AIは人間の対立項ではなく、「即」を拡張し得る新たなインターフェイスとして位置づけられる。

第6章　力の存在論

――「即」と生成の統一原理――

6.1　力とは何か

近代科学は、力を物体の運動を説明する概念として定義した。

社会学では、力は権力や制度として理解される。

心理学では、意志や動機づけとして語られる。

しかし、これらはいずれも、すでに存在している主体や対象を前提としている。

生成の位相存在論は、この前提を採用しない。

本研究では、力とは主体にも客体にも内在しない。

力とは、異なる存在位相が接続し、新たな存在が生成される運動そのものである。

したがって、

力とは、

存在の属性ではない。

存在生成の出来事である。

6.2　「即」は力の現象である

前章まで、「即」を接続の契機として論じてきた。

しかし、「即」は静的な接続ではない。

「即」が成立するとは、

異なる位相が互いに作用し合い、

そこに生成運動が生じることである。

したがって、

「即」は力を生み出す原因ではない。

「即」とは、

力が生成的運動として現れる接続構造そのものである。

本研究では、

これを
生成力（Generative Force）
と呼ぶ。

6.3　「力」は存在以前にある

『人間以前性と自己以前性』では、
存在は自己以前の生成過程を持つことを論じた。
本研究では、
さらに一歩進める。
存在が生成される以前から、
生成そのものは始まっている。
つまり、
存在以前には、
力がある。
しかし、
この力は
物理的エネルギーではない。
自己、
自然、
他者、
時間、
偶然、
死、
これらが交差するときに現れる
生成可能性そのもの
である。
したがって、

存在は、

力から生まれる。

6.4　「即」と「力」は不可分である

ここで、

本論文の中心命題を提示する。

命題2

「即」と「力」は同一ではないが、分離することもできない。

「即」は、

異なる位相の接続構造である。

「力」は、

その接続構造が生成として現象する運動である。

したがって、

両者は

構造と運動

という不可分の関係にある。

構造だけでは生成しない。

運動だけでは方向を持たない。

「即」と「力」が重なるとき、

存在は生成される。

6.5　現代社会が失ったもの

現代社会は、

情報を増やした。

知識を増やした。

評価を増やした。

証明を増やした。

しかし、

「力」は増えなかった。
その理由は、
現代社会が
「即」
を失ったからである。
人間は、
他者と接続しているように見える。
しかし、
実際には
評価と接続している。
自然と接続しているように見える。
しかし、
データと接続している。
芸術と接続しているように見える。
しかし、
市場と接続している。
つまり、
接続そのものは増えている。
しかし、
生成する接続、
すなわち
「即」
は減少している。
これが、
力を失った社会なのである。

6.6　生成の位相存在論の統一原理

以上の議論を総合すると、

生成の位相存在論は、

次のように整理できる。

自己は

自己だけでは存在しない。

自己以外との

「即」

によって生成される。

芸術は、

作品ではない。

「即」を設計する実践である。

人工知能は、

知性ではない。

「即」を媒介するインターフェイスとなり得る。

社会は、

制度ではない。

「即」が生成される位相である。

そして、

生成力は、

現実接地を伴う「即」という接続構造が、

生成的運動として現象するときに成立する。

したがって、

生成の位相存在論全体は、

「即」

という一つの公理によって

統一的に理解できる。

第6章の結論

本章では、「力」を存在の属性ではなく、生成そのものとして再定義した。

また、「即」と「力」を原因と結果としてではなく、構造と運動という不可分の関係として位置づけた。

この整理により、「自己外部化」「人間以前性」「言語デリバティブ」「評価・証明・価値の力学」「生活即芸術」「AI存在論」は、すべて「即」という生成的接続構造と、そこに現れる生成力という一つの理論原理のもとで統合される。

結論

「即」は生成の位相存在論の第一原理である

本論文は、「即」の概念を宗教的・形而上学的な文脈から再解釈し、生成の位相存在論における存在生成の第一原理として再定義することを試みた。

従来、「即」は「色即是空」「煩悩即菩提」「即身成仏」といった命題を通して、二項の同一性や二元論の超克として理解されることが多かった。しかし、本研究は、この理解を根本から見直した。

本研究において、「即」とは同一性ではない。

「即」とは、異なる位相がその差異を保持したまま接続し、新たな存在を生成する生成的出来事である。

したがって、「即」は静的な存在論ではなく、生成そのものの原理である。

この再定義によって、「生活即芸術」は「生活が芸術である」という命題ではなく、生活と芸術との接続から新たな存在が生成される運動として理解される。また、「自己即他者」「人間即自然」といった命題も、同一化ではなく生成の契機として再解釈される。

さらに、本論文は、現代社会を「即」を喪失した記号生成社会として捉え直した。

人工知能、アルゴリズム、評価システム、市場、SNSは、記号が記号を生成する高度な構造を形成している。しかし、その生成が現実接地を伴わない限り、それは存在生成ではなく、自己循環的な記号生成にとどまる。

このことは、現代人が経験する空虚さや無力感を、情報不足や能力不足ではなく、「即」の喪失、すなわち現実との生成的接続の喪失として理解する新たな視点を提供する。

また、本研究では、「力」を主体や対象に内在する属性としてではなく、「即」が成立することによって現象する生成運動として再定義した。

力は所有されるものではない。

力は、自己・他者・自然・時間・社会との生成的接続のなかで現れる。

この意味で、「即」と「力」は切り離すことのできない存在論的構造を形成している。

さらに、本研究は、芸術を作品制作ではなく、「即」を設計する実践として位置づけた。

芸術は、美を表現する制度ではない。

芸術とは、人間・自然・社会・人工知能など、異なる位相のあいだに新たなインターフェイスを構築し、「即」を成立させることで存在生成を促す実践である。

この観点から見ると、Web Installation、生活即芸術、盆栽、見立て、納まりといった美学者母の実践は、それぞれ異なる形式をとりながらも、「即」を設計する営みとして統一的に理解することができる。

最後に、本論文は、「即」を生成の位相存在論全体を統合する第一原理として位置づける。

『生成の位相存在論の公理系』が存在生成の基本構造を示し、『自己外部化の限界と存在生成』が自己と自己以外のインターフェイスを明らかにし、『人間以前性と自己以前性』が現実接地の存在論を論じ、『言語デリバティブ論』が記号生成の力学を分析し、『評価・証明・価値の力学』が社会的生成構造を解明したとすれば、本論文は、それらを貫く生成原理として「即」を提示したことに理論的意義がある。

したがって、「即」は、仏教思想に固有の概念にとどまらない。

それは、人間・芸術・社会・人工知能を横断して存在生成を記述するための普遍的原理であり、生成の位相存在論を統一する公理的概念である。

今後の課題

本研究は、「即」を生成の位相存在論の第一原理として定式化したが、今後さらに検討すべき課題が残されている。

第一に、「即」の形式的記述である。位相空間論、圏論、動的システム理論などを援用し、「即」を数学的・論理学的に表現することで、理論の厳密性を高めることが期待される。

第二に、「即」の経験的研究である。芸術実践、教育、人工知能との協働、建築、地域実践など、多様な場面で「即」がどのように生成されるのかを具体的に分析する必要がある。

第三に、「即」と倫理の関係である。現実接地を伴う生成は、他者や自然との応答責任を含む。この点をさらに展開することで、生成の位相存在論は存在論にとどまらず、AI時代における倫理論や社会哲学へも展開し得る。

本研究は、そのための理論的基盤を提示するものである。

参考文献

著者自身の研究

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. Axioms of Generative Topological Ontology: A Foundational Theory of Existential Generation. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 0.9.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Memorandum.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value: Leverage Structures and Particular Contingency in Generative Topological Ontology. Research Memorandum.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. The Theory of Force: Topological Transformation from Necessity to Contingency in Generative Topological Ontology. Research Memorandum.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. Ontology of Namelessness: Workhood, Sacredness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026. Ontology of Kata: A Foundational Theory of Mark, Namelessness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.

存在論・現象学・差異・力

Aristotle. Metaphysics.

Bergson, Henri. 1911. Creative Evolution. Translated by Arthur Mitchell. New York: Henry Holt.

Deleuze, Gilles. 1994. Difference and Repetition. Translated by Paul Patton. New York: Columbia University Press.

Deleuze, Gilles. 1988. Spinoza: Practical Philosophy. Translated by Robert Hurley. San Francisco: City Lights Books.

Heidegger, Martin. 1962. Being and Time. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. New York: Harper & Row.

Heidegger, Martin. 1969. Identity and Difference. Translated by Joan Stambaugh. New York: Harper & Row.

Merleau-Ponty, Maurice. 2012. Phenomenology of Perception. Translated by Donald A. Landes. London: Routledge.

Nietzsche, Friedrich. 1967. The Will to Power. Translated by Walter Kaufmann and R. J. Hollingdale. New York: Vintage Books.

Spinoza, Baruch. 1994. A Spinoza Reader: The Ethics and Other Works. Edited and translated by Edwin Curley. Princeton: Princeton University Press.

Whitehead, Alfred North. 1978. Process and Reality: An Essay in Cosmology. Corrected Edition. New York: Free Press.

プラグマティズム・経験・現実接地

Dewey, John. 1934. Art as Experience. New York: Minton, Balch & Company.

Dewey, John. 1925. Experience and Nature. Chicago: Open Court.

James, William. 1907. Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking. New York: Longmans, Green.

James, William. 1912. Essays in Radical Empiricism. New York: Longmans, Green.

Peirce, Charles Sanders. 1931–1958. Collected Papers of Charles Sanders Peirce. Edited by Charles Hartshorne, Paul Weiss, and Arthur W. Burks. Cambridge, MA: Harvard University Press.

記号・意味・言語生成

Cassirer, Ernst. 1944. An Essay on Man: An Introduction to a Philosophy of Human Culture. New Haven: Yale University Press.

Eco, Umberto. 1976. A Theory of Semiotics. Bloomington: Indiana University Press.

Peirce, Charles Sanders. 1998. The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings, Volume 2. Bloomington: Indiana University Press.

Saussure, Ferdinand de. 1983. Course in General Linguistics. Translated by Roy Harris. London: Duckworth.

Wittgenstein, Ludwig. 2009. Philosophical Investigations. 4th ed. Translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker, and Joachim Schulte. Chichester: Wiley-Blackwell.

身体・行為・環境

Gibson, James J. 1979. The Ecological Approach to Visual Perception. Boston: Houghton Mifflin.

Ingold, Tim. 2011. Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description. London: Routledge.

Ingold, Tim. 2013. Making: Anthropology, Archaeology, Art and Architecture. London: Routledge.

Maturana, Humberto R., and Francisco J. Varela. 1980. Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living. Dordrecht: D. Reidel.

Varela, Francisco J., Evan Thompson, and Eleanor Rosch. 1991. The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience. Cambridge, MA: MIT Press.

人工知能・記号接地・現実接地

Brooks, Rodney A. 1991. “Intelligence without Representation.” Artificial Intelligence 47: 139–159.

Floridi, Luciano. 2011. The Philosophy of Information. Oxford: Oxford University Press.

Harnad, Stevan. 1990. “The Symbol Grounding Problem.” Physica D: Nonlinear Phenomena 42 (1–3): 335–346.

Searle, John R. 1980. “Minds, Brains, and Programs.” Behavioral and Brain Sciences 3 (3): 417–457.

Turing, Alan M. 1950. “Computing Machinery and Intelligence.” Mind 59 (236): 433–460.

Varela, Francisco J., Evan Thompson, and Eleanor Rosch. 1991. The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience. Cambridge, MA: MIT Press.

日本思想・即・非二元的関係

Dōgen. Shōbōgenzō.

Kūkai. The Meaning of Becoming a Buddha in This Very Body (Sokushin Jōbutsugi).

Kūkai. The Ten Stages of the Development of Mind.

Nishida, Kitarō. 1990. An Inquiry into the Good. Translated by Masao Abe and Christopher Ives. New Haven: Yale University Press.

Nishitani, Keiji. 1982. Religion and Nothingness. Translated by Jan Van Bragt. Berkeley: University of California Press.

Ueda, Shizuteru. Zen and Philosophy.

芸術・生活・インターフェイス

Benjamin, Walter. 1968. “The Work of Art in the Age of Mechanical Reproduction.” In Illuminations, edited by Hannah Arendt. New York: Schocken Books.

Bourriaud, Nicolas. 2002. Relational Aesthetics. Dijon: Les presses du réel.

Dewey, John. 1934. Art as Experience. New York: Minton, Balch & Company.

Manovich, Lev. 2001. The Language of New Media. Cambridge, MA: MIT Press.

McLuhan, Marshall. 1964. Understanding Media: The Extensions of Man. New York: McGraw-Hill.

Heidegger：存在・世界内存在
Deleuze：差異・力・生成
Dewey：経験・芸術と生活の連続性
Peirce：記号の生成過程
Merleau-Ponty：身体的接地
Gibson：環境との直接的関係
Harnad：記号接地問題
Varela：身体化された認知
西田：自己と世界の非二元的関係
空海：即身・即という関係形式

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。